

# 「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集：FXニュースレター

執筆担当：斎藤登美夫

◆◆◆ No.0881 ◆◆◆

26/03/04

## 【 世界情勢混乱も為替の反応鈍い、3月は如何に!? 】

先週末で終了した2月相場の月間変動幅は5.44円(152.27-157.71円)。1月よりは小動きに終わったものの、それでも「まあまあ」の変動を達成したと言ってもよい。

しかし、個人的にやや気になるのは、再三再四レポートしているように、今年の世界情勢は米国を中心に年明けからビッグニュースが連日のように相次いでいるにもかかわらず、為替市場(とくにドル/円相場)の反応が非常に鈍いことだ。ここ最近も「イラン情勢が波乱要因」と考えられていることはまず間違いないものの、具体的な値動きとなると限られている。足もとの3月相場で、そうした事態を果たして打破できるのだろうか。

### ◎足もと3月は材料盛り沢山、「大きな動意」を期待したいが…

今回の当レターでは、月初恒例となっている過去の経験則を参考にした月間見通しをレポートするが、その前に1990年以降昨年まで過去36年間の3月相場の勝敗を指摘しておきたい。具体的には18勝18敗で、まったくの互角だった。

改めて指摘するまでもなく、3月は多くの日本企業にとって決算期末にあたる。そのため、「決算期末に向けたリパトリエーション」、つまり本邦勢による資金の国内還流など幾つかの需給要因・決算対策もあり円高有利との指摘も聞かれた時期があったものの、それはすでに過去の経験則だ。データの的にはドル高とドル安、どちらが有利と言えない状況となっている感を否めない。

しかし、3月相場には別に非常に興味深い特徴がひとつあり、それは平均すると「一年で一番大きく動く月」であること。

典型例は月間10.52円で年間を通しダントツの変動を記録した2020年だが、翌2021年も4.61円の変動でやはり年間トップ。そして2022年は年間2位ながら変動幅は実に10.45円、2023年も変動幅8.26円でやはり年間2位を記録している。残念ながら一昨年、そして昨年は当てはまらなかったが、近年に集中して起こっているということは興味深い事象言えそう。頭の片隅にでもとどめておきたい。

そうしたなか、幸か不幸か、先でも取り上げたように今年の世界情勢は米国を中心に年明けからビッグニュースが相次いでいる。その典型事例は、つい先日発生した米国とイスラエルがイランを電撃的に攻撃、最高指導者のホメイニ師が死亡するといった「事件」だろう。そして、この件はいまだに継続案件となっている。

荒れ模様の株式や暗号資産ビットコインの動きなどを横目に見つつ、為替市場の動意は何故か鈍いのだが、キッカケ次第で予断を許さない気もしないではない。前段で指摘したように、経験則的に3月相場は「よく動く」という経験則もある。しっかりと注意しておきたいところだ。

一方、過去の3月を歴史的な面で振り返ると、興味深い事象が2つうかがえる。

ひとつは、先にも記したように、日本企業の多くが決算期末にあたるのが影響しているのか、「企業破綻」や「損失公表」といったニュースが数多くみられること。そしてもうひとつは、「為替や金融市場に関する、歴史トピックスも少なくない」ことだろう。

後者についてのみ典型事例を示せば、1933年のルーズベルト大統領による「ニューディール政策」発表になるだろうが、ほかにも1ドル=360円の固定相場制導入を決定した1949年の「ドッジライン」発表、1953年の日本株大暴落(通称「スターリン暴落」)などのほか、もう少し具体的なマーケット寄りの事象として、「NYダウが初めて1万ドル突破(1999年)」、「ドル/円が1995年に記録した戦後最安値を更新(2011年)

**\*注：安値を更新しただけで、大底75.57円記録は同年10月**—などがすべて3月中に起こっている。また2024年の3月には、「日銀がマイナス金利政策を解除、17年ぶりの利上げを実施」—したことも記憶に新しい。

もちろん、こうしたことは毎年確実に起こるわけではないが、再三再四の指摘で恐縮ながら今年ここまでの世界情勢をみると、「なにがあっても不思議はない」—という気さえしないでもない。

